

佐佐木幸綱選

八本の箸が四つの納豆を混ぜる音だけして
リビング (横浜市) 富尾 大地
大瑠璃鳥が高尾の森に啼く夏の来たりて軽き
登山靴買ふ (東京都) 上田 国博
川床の泥を濁して黒雲のごとく渦巻く稚魚の
一群 (水戸市) 檜山佳与子
古書店のはずが本棚狭くなり、フィギュアと
トレカ幅を利かせる (相馬市) 根岸 浩一
尖ったこと知る吾子の強烈な頭突き「顎」
「鼻」「頬骨」「心」(名古屋市) 水口 美紀
教え子に髪切られつつ若き日の思い出語る丘
の理髪店 (吉野川市) 喜島 成幸
欲しかったロードバイクをついに買う全国回
る夢果たしたい (川崎市) 中村真一郎
裏庭に十葉白き花咲かせ三浦半島梅雨に入り
たり (横浜市) 白川 修
つくづくと足輕の槍の構えなり硝子に映るわ
がビリヤード (東京都) 富見井高志
「認知症という別れあり」との走り書き祖母
介護する母のノートに (佐伯市) 河北 苗

【評】第一首、四人家族が朝食を食べているリビング。二つの数詞をクローズアップして独特。第二首、初夏がやってきた。初夏はオオルリの季節、そして登山の季節でもある。第三首、鮎の稚魚だろうか。第四句までの表現、工夫が読める。

高野公彦選

ヘルパーさんと言えば全てに事足りていまだ
覚えぬ数人の名前 (鹿児島市) 松本 清展
ありし日に憲法九条死守せむと声張り上げし
おたかさん頭つ (枚方市) 鍵山奈美江
戦争を引き起こすのはトランプとプーチン、
ネタニヤフ、あと一人(名古屋市) 小城 勝相
毎日がクマとトラとで煩わし田舎暮らしも心
休まず (五所川原市) 戸沢大二郎
一番より二番が好きな「夏は来ぬ」関東地方
は今日梅雨に入る (埼玉県) 中里 史子
コンビニで唐揚げ買ってふと思う平和って
いね幸せてこれ (千葉県) 渡部 健
モーツァルト次にベートーヴェンを弾き休
日、音符にはぐされてゆく(富山市) 松田 わこ
梅、桜、菜の花、ツツジ、藤の花次は紫陽花
撮影三昧 (徳島県) 阿部 秀一
野良猫を保護猫に変え殺処分減りたるを聞く
言葉の力 (千曲市) 米沢 光人
スイミング、オセロ、卓球、カラオケと認知
予防に励む八十歳 (東松山市) 山本 峯子

【評】1首目、名前を覚えていないのに丁寧に介護してくれるヘルパーさんたちへの深い感謝の思い。2首目、九条の危うき今、土井たか子氏の先見の明を思う作者。3首目、あと一人は誰?というクイズのような歌。4首目、このトラは人間。

歌壇



村さゆり

俳句時評 虚子と健吉

井上泰至の近刊『俳句の伝統―虚子と健吉』(角川書店)は、昭和の俳句史を背景に、評論家山本健吉と俳人高浜虚子を論じること、俳句の「伝統」を問う。俳句の本質を「挨拶」「滑稽」「即派